

10月2日、一瞬の秋に訃報を聞く。

夜、妹さんから電話があった。「8月に急に悪くなって、施設で。」との声。

<K>こと金本浩一。大学闘争最良の同伴者、共闘者、批判者そして挑発者。

<S>が未だに〈岡大全共闘〉と認める唯一無二の存在。

その所以は、第一義的には、岡大闘争の意味が5項目要求として具現化し、バリケードストライキとしてこの秩序社会の中へ突出していった直後、或いはそれに先んじて、〈すでに提出してあった卒業論文を教授の研究室へ侵入して奪い返し、卒業を拒否していった。そしてそのままバリケードが不可視となっても「大学」が「正常化」されても、拒否を貫徹し続けた、〉

というところにある。「正常化」になし崩れていった連中とはモノが違う、〈拒否〉の質が違う。

'69年4月12日、<K>の拒否の意思は、雪崩落ちていく大学とその自治へ向けて、〈時間よ止まれ〉とばかりに、〈石〉と化して、空に鑿し時を穿たんとした。鑿空の穿結！

『鑿空の穿結』は、そのことにより傷害～致死を問われて被告とされた<K>が、『岡山救援通信』に寄せた一文のタイトルである。筆者は当時この『通信』に関わっており、<K>の原稿を筆写清書してファックス印刷に回す幸運に遭遇した。

<K>の拒否の質から発せられることばとして、〈くだらん〉という言葉がある。

<K>はこれをよく用いた。

他人の言動や事象を貶す時に使われるこのコトバを<K>が用いるとき、そこに根底的な批判が込められていることを〈坂本〉が知るのは、'70年代後半、〈坂本〉を被告とする宿舍明渡し裁判において<K>を証人申請した時である。

<K>が証言として求められていた一つは、前記'69年4.12事件を契機として、〈既成の大学共同体につながる一切の職務形態を拒否〉していた教官Oが、その後、何年かして授業業務を再開していった事を含めてどう捉えるか、についての証言である。因みにO教官は、<K>が所属していた“反戦会議”というサークルの顧問教官として<K>とは議論を交換してきた間柄でもあった。

『〈くだらん〉ですね。』という証言の意味をさらに問われて、〈K〉は、
『〈下降しない、降りていかない〉ということです。』と証言した。
大学紛争～闘争によって、知の責任を根底的に問われている者たちは、
降りて、降りて、降りて行かねばならない。

何処へ？

既存の知によって成り立っているこの世界の基底部まで、いや、さら
に~~~~

くだらん、と、〈K〉が言う。上昇志向に覆われた世界は凍り付いてい
い。

降りて降りて降りて~~~~

教室を全宇宙空間に拡大し、〈巡礼〉の歩を歩み始めた者の、〈乞食巡
礼〉の鈴の音は、いまも響き得ているか、〈K〉の耳に届き得ている
か、.....

~~~~巡礼の鈴の音が聞こえますか~~~~

～2023年10月2日～8日～9日～

〈坂本〉こと～